

原体験としての戦後史学

泉 雅博

歴史意識の現在——戦後歴史学と社会史

日本史学が現在、一体どのような歴史意識のもとにあるかと訊ねてみたとき、大きくは今日、「戦後歴史学」と概括されるところの歴史意識と、「社会史」として概括されるところの歴史意識^①によって代表させることができるのではないだろうか。戦後歴史学とは、一九四五年の敗戦後の日本史学を、今日にいたるまで終始リードしてきた研究成果に附せられた名称である。その成果に集約的な表現を与えるならば、「変革の歴史学」と称されるもので、その歴史意識は日本の近代化・民主化の標榜にあるといわれる^②。一方、フランスで二〇世紀の初めに誕生した社会史は、日本で「新しい歴史学」と称されるように、その学的世界に関心が高まり広く迎えられようになったのは、いわゆる高度経済成長の終焉後、一九八〇年代以降のこと^③に属する。

高度経済成長期をくぐり抜けた日本社会は、まちがいなく物質・技術面での近代化を達成した。しかし、その達成された近代については、深い懐疑の念もまわりつく。日本史学の研究世界においては、戦後歴史学の問い直しとして懐疑の念は表明され、その「問い直しの歴史学」^④に対して附せられた一種の記号が社会史とみなされている。一国的な国民国家における近代の実現を志向してきた戦後歴史学の歴史意識に対して、社会史の歴史意識は近代に対する懐疑、批判に起点を置くのである。国民国家に対して地域、変化に対して日常、物質に対して心性、段階に対して長期波動、そしてヨーロッパ近代モデルの相対化など、これらのテーマを通じて社会史の志向するところは歴史の全体的・総体的把握であるという。しかし、多様な人間活動の総体を重層的・多元的に捉えようとする社会史研究は、往々にして無限定な研究対象の拡散のなかで、歴史事実の無自覚な

相対化を不可避的としている面もみうけられる。

戦後歴史学の終焉が語られ、社会史が先行きの見えない相対主義に陥っているとみられる現状にあつて、日本歴史の研究を志す者は、一体、今、どこに自らの立脚点を定めたらよいのだろうか。おそらく、その問いに対する解答らしきものを見出すためには、少なくとも戦後における日本史学——「戦後史学」の歩みを徹底的に検証し、反省してみることに求められるだろう。ただ、この課題は今の私にとつて、あまりにも大きすぎる。このノートでは、私自身が絶大な影響を受けた二人の歴史研究者——長倉保先生と網野善彦先生を取り上げ、紹介することを通じて、日本の歴史研究の現在と今後を考えてみる手がかりを得たいと思う。

戦後歴史学とともに——長倉保先生

一九七〇年、神奈川大学の経済学部に進学した私は、三年になつた一九七二年から長倉保先生のゼミナールに所属し、日本近世の社会経済史を本格的に学ぶ機会を得た。社会経済史を選択した理由も、近世を時代対象とした理由も、決して明確なものではなかつた。何となく歴史好きだった私は、経済学部で学んだ経済史が新鮮であつたことと、江戸時代の史料が身近に感じられたことから、近世の社会経済史を研究している長倉先生

のゼミナールを選択した。

長倉保先生の歴史研究は、まさに敗戦後の清新な戦後歴史学とともにあつたといえよう。一九四九年、東京大学文学部国史学科に進学した先生は、翌一九五〇年に、同大教授寶月圭吾氏を中心になつて組織した東京大学農村史料調査会に所属し、その歴史研究を本格化させた。同会は文学部国史学科の学生たちを会員に、農村史料の調査、農村史、農民史の研究を目的に結成された会で、長野県諏訪郡の農村史料調査から活動を始めていた。長倉先生はこの会に発足当初から参加し、初めての学術論文「御射山神戸の歴史」も、一九五二年に刊行された農村史料調査会編『近世農村の構造』^⑤に発表している。先生は最晩年まで農村史料から離れることはなかつたが、それはこの調査会の体験のなかで、歴史の真実を農村史料から必ずや掴み取るこゝとができると確信していたからではないだろうか。

一九四五年の敗戦の年から一九五五年にいたる一〇年間の日本社会は、敗戦の混乱の直中にある一方で、時代の空気はそれ故に非常に自由でもあつたといふ^⑥。歴史研究もそうした時代の空気の中かで、皇国史観の徹底的な批判のうへ、マルクス主義歴史学を大きな潮流としながら、近代主義歴史学、実証主義歴史学などが一つの潮流を形成し、また歴史学と他分野の学問との協働も積極的にはかれた^⑦。長倉先生は、後述のように一九四三年、水戸高校進学早々に学徒出陣によつて出征することに

なるが、復員・復学後の同校時代にはマルキシズム研究会に入っていることから、大学進学後は迷うことなくマルクス主義歴史学を方法論とする歴史研究に進んだものと推測される。

指摘するまでもなく、マルクス主義歴史学においては、日本の歴史が原始以来どのような発展段階をたどってきたかという道筋の解明が、社会構成体の段階的展開として究明されてきている。社会構成体という理論範疇については、必ずしも一つの理解が確立されているとはいえないというが、永原慶二氏によれば、概略、次のように規定される。⁸すなわち、一定の歴史的社会的基礎を、生産力の段階に規定されて成立する経済的諸関係の構造的結合体と考え、その土台の上に成立する法的・政治的諸形態、およびそれに対応する意識形態まで含めて構築される社会的総体の構造とその発展理論が、社会構成体論ということになる。そしてまた、そうした社会構成体を規定する生産様式の基本形態には、アジア的・古典古代的・封建的・近代ブルジョア的生産様式が存在するとし、社会構成体はその生産様式の発展によって段階的移行を遂げるというものである。

戦後歴史学は、とりわけマルクス主義歴史学の社会構成体論を理論的方法として、輝かしい成果をあげてきた。原始以来の日本の歴史を、一貫した視点で系統的に明らかにし、「国民的スタンダード」とも称すべき通説を形成したと評価されている。⁹社会構成体論は、まさにグラント・セオリーというに相応しい

ものだった。長倉先生も社会構成体論を理論的方法としながら、近世史の分野で数多くの仕事を成就している。¹⁰一九五〇年、信濃の農村調査から本格化したその研究は、以後、調査対象地域、テーマともに広がりを見せながら深められていった。先生が史料調査のために歩いた地域を数え上げてみると、信濃のほかには会津や常陸、下野、相模、それに撰津、但馬など日本の広い範囲におよんでいる。また、研究テーマも数多くの領域をカバーしており、例えば信濃での農村構造や新田地主を分析した仕事、撰津での灘酒造業の研究、関東・東北での村方地主、豪農、あるいは会津・烏山・小田原藩の藩政、さらには二宮尊徳による報徳仕法を考察した仕事など、研究史上に揺るぎない位置を保持し続けるであろう多くの労作を世に問われている。先生の研究は第一次史料の精密な実証分析を信条としたため、論文のテーマは個別的なものが多いが、実はそれら全ての研究が幕藩体制論という体系に向かうものとして考え抜かれていたことは、一読すれば明瞭である。

近世日本は、社会構成の発展段階としての封建段階として把握され、その日本の特殊性に与えられた概念規定が幕藩制社会である。中世を封建制ではなく、家父長的家内奴隷制を基礎とする奴隷制社会であると主張、古代をアジア的な総体的奴隷制の段階と規定し、近世になって初めて小農民が自立することによって封建制が成立、展開したと捉えたのは安良城盛昭氏であ

った。一九五三年、『歴史学研究』（歴史学研究会編）誌上に発表された論文「大閤検地の歴史的前提^①」で表明されたこの安良城氏の見解は、その後の近世史研究の方向を決定づけたともいえる。長倉先生も近世を封建制の段階として捉えていたが、それを幕藩体制論として鍛え上げていくうえで、数々の研究は大きな貢献をなした。全ての論文に貫かれている視点は、幕藩体制の根幹は封建的土地所有にあり、その土地所有を体現している存在が小農であるという認識である。小農を歴史的存在の中核に据え、小農の自立・展開・分解の態様を、第一次史料の精密な分析から解明することがまず重視される。それと同時に、このような小農の動向に対して幕藩権力はどのような対応をみせたかが問われ、幕藩制社会の構造的特質が究明されていく。それは日本近代の生成をも射程におさめながら、幕藩制という社会体制の成立から解体までをトータルに解明しようとするものであった。そして、その研究方法は、戦後の近世史研究の奔流ともなつていった。

前述のように、私は一九七二年に長倉保先生のゼミナールに所属するが、その頃、いや一九七〇年代を通じて、依然として社会構成体論は歴史研究の方法論として非常に重視されていたと思われる。もとより、先生自身は五〇歳代に罹った不治の病氣と闘いながら、一九九六年、七十二歳で亡くなるまで幕藩制社会論の体系化のために農村史料を分析され続けていた。

そうしたなか、一九八〇年代に入ると、これまで終始戦後史学をリードしてきた戦後歴史学に対して、その終焉が本格的に語られ始めるようになる。戦後歴史学の理論的主軸を形成してきたマルクス主義歴史学に対して、その社会構成体の発展理論はヨーロッパ基準の単線的・単系的発展段階理論であるに過ぎないのではないかという批判が、やはりヨーロッパからもたらされた社会史を媒介環にしなが行われるようになった。また、歴史は進歩するものという確信のもと近代化・民主化を当面の目標に掲げ、社会の発展・進歩の筋道を法則的・論理的に解明しようとする戦後歴史学の発想の基本的枠組に対しても、一国的な国民国家においての実現を目指すものであって、世界史的視野に欠けるものであるという批判が寄せられるようになる。そして、高度経済成長期をくぐり抜けた日本社会そのものの現実が、近代化・民主化、とりわけ近代化というスローガンを空虚なものとし、リアリティーを失わせてしまったといえるだろう。さらには、一九八九年のベルリンの壁崩壊前後に始まる一連の社会主義圏における動向は、グラウンド・ゼロリーの崩壊をも意味するものではないかと捉えられるようになっていった^②。

現在、戦後歴史学が曝されている批判は、もとより長倉先生の歴史研究にも該当する。正直に告白すると、一九八〇年代の半ば頃から、私自身そのような学的状況と世界の動きのなかで、長倉先生の仕事に目を通す機会が少なくなつていった。戦後歴

史学の終焉が語られ、一方で社会史の流行的風潮に踵を接するかのようにして……。

戦後歴史学からの挫折のなかで——網野善彦先生

一九八二年から私は、日本常民文化研究所で古文書整理の仕事を行うことになった。日本常民文化研究所とは、明治・大正期の実業界の巨人、渋沢栄一の孫にあたる渋沢敬三氏が、一九一八年頃、自宅の物置小屋の屋根裏に小さな博物館を作り、それを文字通りアチック・ミュージアムと名付けたことに始まる研究所である。¹³ 渋沢敬三氏は大蔵大臣・日本銀行総裁などを歴任した人物だが、普通の人々——常民の民俗・歴史に深い関心を寄せ、自身、民俗研究者でもあった。その戦前からの長い歴史を有する日本常民文化研究所が、一九八二年に神奈川大学の附置研究所として新たな出発をすることになり、私は偶然にも開設の年から研究所が所管する古文書の整理を行う仕事に携わることになった。そして、その仕事に関わって、一九八〇年に名古屋大学から神奈川大学に赴任し、かつて勤めていた日本常民文化研究所の所員に再び着いた網野善彦先生の教えを受ける機会を得ることになった。

周知のように、網野先生の歴史研究は世の人々から「網野史学」という呼び名が与えられているほど独自のものであるが、

その独自の研究によって一九八〇年代以降、日本人の歴史意識の形成にまで深く関わる形で、日本史学のうえで最もトータルな日本史像を打ち立てた研究者との評価がある。¹⁴ また、日本史学における「社会史の現在」との評価もなされている。¹⁵ しかし、そのような評価を受けている網野史学の出発も、長倉先生と同様、一九四五年度の敗戦の年からの一〇年間、つまり戦後歴史学の離陸・飛翔期のうちにあった。ただ後に述べるように、そこから「落ちこぼれた」ことが網野先生の歴史研究を独自のものとした。先生の初めての学術論文は、一九五一年に『歴史評論』（民主主義科学者協会編）誌上に発表された「若狭における封建革命¹⁶」である。発表誌とともにタイトルからも明らかのように、先生が戦後歴史学の離陸期、その一翼に列なっていたことは疑うべくもない。ところが、まもなくしてこの論文を「愚劣で恥ずべきもの」と位置づけ、この世から葬り去るためにその後の仕事を開始したと発言するようになる。その理由は後で訊ねることにし、戦後歴史学から挫折して、一から勉強をやり直した先生の仕事が本格的に結実しはじめるのは一九七〇年代以降のことには属する。先生の代表的な著作としては、『蒙古襲来』（一九七四年）、『無縁・公界・楽』（一九七八年、一九八七年に増補版を出版）、『中世東寺と東寺領莊園』（一九七八年）、『日本中世の民衆像』（一九八〇年）、『東と西の語る日本の歴史』（一九八二年）、『日本中世の非農業民と天皇』（一九八四年）、『異形の王

権』（一九八六年）、『日本論の視座』（一九九〇年）、『日本社会再考』（一九九四年）、『日本中世に何が起きたか』（一九九七年）、『日本』とは何か』（二〇〇〇年）などをあげることができる。ただ、これはほんのごく一部であり、その全てを数え上げたならば、果たしてこの仕事量は人間業かと疑いたくなるほどの量になる。

ここでは、網野史学とも称される網野善彦先生の独創的な歴史研究を、先生の手になる最後の著作となった『日本』とは何か⁽¹⁷⁾を中心にしながらか考えてみることにする。本書は肺ガンを患った先生が、執筆途中に大手術を挟み書き上げられたもので、文字通り命がけで著した書になる。また、先生自身の歴史観を明確に示されるとともに、かつて挫折をあげわった戦後歴史学に対する学問的態度を表明した書でもある。

先生は『日本』とは何かの冒頭で、人類の歴史を人間の一生にたとえ、人類はいまや「青年時代」をこえて「壮年時代」に入ったと述べている。そのように見なす一つの理由は、広島・長崎に投下された原子爆弾による惨状にあるとし、この「原爆投下は、ごく短期的には「大日本帝国」の降伏、その敗戦をもたらず決定的な契機となったが、人類が自らを滅しうるだけの巨大な力を、自然の中から開発したという疑う余地のない厳粛な事実を、多大な犠牲を払って結果的に明確にしたという点で、人類の歴史に決定的な時期を画すことになった」という。

さらに、人類の直面する死滅にいたる危険は兵器だけではなく、「開発による自然の破壊と公害」にもあるとし、現在、人類には壮年時代らしい思慮深く知恵のある生き方が求められていると指摘する。そのうえで、かかる事態の到来は、歴史に対する従来の見方自体を大きく変えることにもなったと述べている。

先生もまた、近代以後の歴史学の根底を支えているのは、「進歩史観」であると指摘する。これまでの歴史研究は、「人間による自然の法則の理解に基づくその開発、そこから得られた生産力の発展こそ、社会の「進歩」の原動力であり、それに伴っておこる矛盾をこうした生産力の担い手が克服し、「進歩」を実現していく過程に、人類の歴史の基本的な筋道を見出そうとする見方」で行われてきたという。しかし、そうした「自然の開発発が、自然を破壊して人類の存立を危うくし、そこで得られた巨大な力、あるいは極微の世界が人類を死滅させる危険を持つにいたった」現在、このような事態そのものが「進歩」史観の持つ根本的な問題を表面化させており、それを徹底的に再検討し、人類社会の歴史をあらためて見直し、「進歩」の名の下に切り捨てられてきたものに目を向けつつ、歴史を再構成することが、必須の課題」となってきたと訴える。進歩の名のもとに切り捨てられてきたもの、たとえば遍歴・漂泊の暮らしや、山野河海の世界、女性・老人・子ども、そして被差別の民などへ、先生の眼差しは注がれ続けられてきたが、このような「近代以

降の『進歩史観』の視野から脱落してきた多様な世界を、余すところなくすくいあげ、それを人類史のなかに位置づけて、新たな人類史像を描き出し、本来の意味での人類の「進歩」とは何かを追求、「模索」されなければならない、というのが網野先生の歴史観である。

そのような歴史観のもとで先生は、早くから現在の日本人の自己認識の形成にまで深く関わっている日本史像には、多くの問題点があると指摘してきた。そもそも日本人である私たち自身が、日本という国の名前がいつ決まったのか、天皇という称号がいつ決まったのかを知らないということを先生によって気付かされ、まず愕然とさせられることになった。「初めに日本ありき」といった態度が、歴史研究のうえでもさまざまな問題点をもたらしていることは間違いなく、そのことを真つ正面から問いかけた歴史研究者を、私は網野先生を除いて他に知らない。また先生によって、私たちにはいつのまにか摺り込まれた、日本の理解をめぐる常識が存在することを自覚化させられることにもなった。例えば、日本は単一の民族からなる単一の国家であり、そのうえ海によって閉ざされた島国であるため、日本人は均質性の高い民族になったという常識がある。しかし、日本列島には日本国のほかに琉球王国、いわゆる日本人のほかにアイヌ民族が存在し、また西日本と東日本の間には、日常生活のレベルでも実感されるほどのさまざまな習慣・文化上の違いが

ある。ところが従来の日本をめぐる歴史研究は、こうした事実を無視、ないしは軽視することによって進められてきたことは確かなことと思われる。ほかにも私たちがとらわれている常識として、日本人は弥生時代以来、主に稲作を中心とした農業に従事してきており、日本文化の根本は稲に求められるという日本像がある。しかし、これも国土の七〇パーセント余が山地で、周囲をすべて海で囲まれた島々からなるこの国の姿を見れば、林業や漁業を無視して日本を考えることはできないはずだが、ここでも瑞穂国日本という常識にとらわれていなかったとはいえない歴史研究の現実が存在する。

網野先生は、現在の日本人の自己認識の形成に深く関わるこのような日本をめぐる国民的ともいうべき常識について、その形成の淵源を明らかにするとともに、その虚偽性を史実に基づき究明し、真の日本像を構築しなければならないという。そしてその作業は、未曾有の大転換期にさしかかっている二一世紀の人類社会において、われわれ日本人が何をなすべきか、また何をなしうるかを正確に見極めるためにも、正面から立ち向かわなくてはならない課題であるとされる。『日本』とは何か』は、その課題に立ち向かった書であり、課題はほぼ達成されたといえるだろう。

旧来の日本像を丸ごと問い直すことになった『日本』とは何か』、その最終章には「日本論」の展望」が置かれている。網

野先生はそこで、「私自身も若いころその真只中に生きてきた」という戦後歴史学に直接言及し、ついにその終焉の訪れを語ることになる。まず戦後歴史学も、常識化している日本論、日本人論を無意識的、無自覚的に前提して学問的な成果をあげてきたことを問うたうえで、その方法論上の問題点を指摘する。前述のように、先生も近代歴史学の根底を支えているのは「進歩史観」であると捉えているが、戦後歴史学こそ、その近代歴史学の精髓との評価を受けている学問体系である。「進歩史観」を最も重要な支柱として展開されてきた戦後歴史学、しかしその支柱は、人類が自らを滅ぼしうる力を獲得してしまったという厳粛な事実そのものによって崩され、それとともに自然をひたすら開発して生産力を発展させることに社会の進歩の原動力を求めてきた歴史の見方も根本から覆ってしまった、これが網野先生の現実認識である。したがって、人類の進歩を社会構成の段階的發展として捉えようとする社会構成理論は、もはやそのままでは通用しないばかりでなく、その主張は「人類の近い将来での滅亡を認めることにもなりうる」と断言、戦後歴史学に退場を迫ることになる。

では、今後の日本の歴史研究に最も必要なことは何かという問い掛けには、「この複雑な列島の自然との関わりで形成される諸地域社会のさまざまな生業と個性的な生活の歴史を、正確にとらえることにある」と答える。自他の個性を真に尊重しつつ、

この社会に生きる道を開いていくためには、そうした歴史研究が不可欠だというのである。また、このような「諸地域の社会の形成過程、その構成のあり方をより深く追求することによって、具体的な交流の実態や社会構成の共通性・差異の比較を通じた人類社会全体とのさまざまな関わりをあきらかにする必要」も生じてくるという。なぜなら、人類の社会における列島社会の位置づけを明確にとらえることが、そうすることによって初めて可能になるからと指摘する。

真の意味での人間の進歩とは何か、そのことを考え抜くことは人類全体の前進に寄与することになるだろう。だからこそ、進歩の名のもとに切り捨てられてきた人々に熱い眼差しを注ぐことによって、進歩の真の意味を考え抜いた歴史研究者が網野善彦先生であったともいえるのではないだろうか。

戦後歴史学と網野史学とのほざまで

——ポスト戦後史学をみすえて

一九九六年、長倉保先生を、そして二〇〇四年、網野善彦先生を私たちは、いや私は失った。その当時は空虚感のみにさいなまれていたが、昨今、ようやく両先生と向きあうことができようになつてきた。日本史学の現在、いやここでも私自身の研究のこれからを考える手がかりを得るためには、両先生と向

きあうほかないと思ひ定めるようになったからである。その試みの一端が、この拙いノートでもある。

長倉先生は、戦後歴史学とともに歩んだ先生である。一方、網野先生は戦後歴史学に終焉を迫った先生である。一時期、私は身を引き裂かれるような思いに立ち至ったこともあった。しかし現在、二人の先生の生涯を振り返るなかで、ある意味あたりまえのことだが、その学問体系もそれぞれの生涯のうちにあつることになつた。おそらく、歴史研究者に限らず学問を志す者であるなら誰しもが、自己の経験・体験を総動員しつ一つ一つの学問体系を構想、創造していくものではないだろうか。しかも、その経験・体験のなかでも、原点的な体験―原体験を核としながら。¹⁸⁾

長倉先生が逝去されたとき、神奈川大学大学院で指導を受けた者たちによつて、少しでも学恩に報いようと、先生の論文集『幕藩体制解体の史的研究』¹⁹⁾を編んだ。まぎれもない完璧主義者であつた先生は、生前、数多くの論文を執筆しながら、ついにそれを著書として上梓することがなかつたからである。そのとき編集の仕事に携わるなかで、改めて先生の仕事を読み返してみても感じられたことは、全ての論考の背後に秘められている激しい気魄と強い意志であつた。そこには、何かの使命感に突き動かされている感さえある先生の姿が見てとられ、圧倒される思いであつた。

これは調査のおり全く偶然に拝見したのだが、先生の右肩には痛々しいばかりの大きな傷痕があつた。先生は一九二三年、静岡県駿東郡愛鷹村柳沢（現沼津市）に生まれ、地元の小・中学校を終えた後、一九四三年、茨城県の水戸高等学校へ進学している。時代は太平洋戦争の真つ直中であり、水戸高入学早々の先生を待ち受けていたものは、学徒出陣による戦地への出征だつた。出征先は激しい戦闘が行われたことで知られるルソン島で、まさに日々死と直面し、九死に一生を得て復員した。右肩の傷痕は、ルソン島での銃撃戦のさなかに受けた貫通銃創の痕だつた。

長倉先生は折に触れては記憶の糸を手繰られ、繰り返し戦争体験を自らに問い掛けられていた。私には先生の学問上の原点は、この戦争体験にあつたように思われる。戦争で亡くなつた多くの人々の慰霊のためにも、一切の妥協を許さぬ厳しい態度で研究に臨まれたのではないだろうか。その思念が論文の背後にも秘められ、人々の心を打つものになつたのではないかと思われる。日本社会の近代化・民主化を標榜し、再び軍国主義の台頭を許さない厳しい態度で戦後歴史学を築き上げてきた良質な研究者の一群には、死と向き合った共通の戦争体験が存在している。それが共通の言説世界を形成するとともに、研究に並々ならぬ緊張感を与えていた。

戦争体験の風化が叫ばれ、目に見えてナショナリズムが台頭

してきている日本社会の現在を直視するとき、戦後歴史学を創造してきた歴史研究者の生涯をも振り返るなかで、いま一度、終焉が語られつつある戦後歴史学の意味を考え抜いてみることは非常に重要なことではないだろうか。かつては届かなかった、長倉先生の学問に傾けられた気魄、意志、それがようやく胸に響くようになった今の私には、そのように思われる。

一方、長倉保先生と同様、戦後歴史学の離陸期に本格的に歴史研究を開始しそのうちにありながら、ある時から「落ちこぼれる」ことになり、結果として戦後歴史学に終焉を迫ることになった網野善彦先生の歩みとは一体どのようなものであったのだろうか。

長倉先生は自身の人生について文字化されたものを遺さなかったが、網野先生は自身の人生を振り返るいくつかの文章を書いている⁽²⁰⁾。それらによると、一九二八年生まれの先生は、敗戦の年一七歳で、徴兵検査を受けることもなくその日を迎えたという。戦争中は「どちらかという大変ボンヤリした学生」で、戦争について深刻に考えたり、反戦的な考え方を持っていたわけでもなかった。また皇国少年というわけでもなく、「その場その場の状況に流されながら生きてきた」と回顧している。そうした先生が自分自身を意識しはじめるのは敗戦後のことで、永原慶二氏に歴史学の魅力を教えられ、日本中世史を学ぶ道に進んだのは一九四七年、長倉先生と同じ東京大学文学部国史学科

に進学したときだった。同時に、大学一年の後半頃から学友会委員という自治会の委員となって左翼の学生運動の渦中に入り、二年の後半からは民主主義学生同盟という組織に属しオルガナイザーの役割を担うことになる。当時、大学へ行くことはほとんどなかったということだが、三年になり卒業するためには卒業論文を書かなければならず大学へ足を運ぶようになり、卒業後は、一九八二年に神奈川大学の附置研究所となる日本常民文化研究所に就職した。しかし、就職してまもなく歴史学研究会の委員となった先生は、研究所での仕事よりもほとんどの時間を歴史学研究会の運動に費やし、国民的歴史学運動や山村工作隊にも関わりを持つようになっていく。ところが、その先生が、突然とその場所から脱落することになった。

先生は、具体的な内容は語れないがと断ったうえで、「歴史学研究会や常民文化研究所内部の問題に関連してあるきっかけ」があり、一九五三年の初め頃からそれまで行ってきた活動に疑問を持ち始めたという。そして、そう、いう状態にあった年の夏ごろ、「ある衝撃」を受けて「豁然」と「それまでの自分が全く無内容」であったことに気付くことになる。先生はそれから勉強を一からやり直しはじめ、それがその後の研究生生活の原点になったという。網野史学の形成にいたる原体験、それは一九四七年から五三年にかけての時期の歴史研究と左翼運動、そしてそこでの挫折にあったといえるのではないだろうか。

網野先生の成した歴大な仕事は、先生の代表的著作『無縁・公界・楽』の増補版が出版された一九八七年頃を画して、その前後ではやや仕事のトーンに変化が認められるが、そうしたトーンの変化も含みながら、ほぼ全ての仕事が文字通り「日本とは何か」に収斂しているといつてよいだろう。そしてまた、私にはそのいずれの時期においても歴史に向けられた眼差しが奥深くには、先生の原体験が深く突き刺さっているように思われる。歴史を未開と文明、無縁と有縁の対立軸で捉え、前者の側から後者を撃つスタンスをとっていた一九八七年以前、そこには戦後歴史学の発展期、孤立無援の側に身をおき、無念を噛みしめながら歴史研究を行っていた先生の姿さえ彷彿とする。また、一九八七年以降は日本社会の歴史認識から、おそらく封建制概念の追放までを視野に入れながら、原始から現代にいたる資本主義の生成の問題の解明に向かわれているが、その研究の方向性のなかにも、かつて封建革命、封建制度について記した文章を「愚劣で恥ずべきもの」とした先生の原体験が深く突き刺さってはいないだろうか。

網野先生も長倉先生と同じ時期に、本格的に歴史研究の世界に入り、ほぼ同じ時期に学術論文を公表しながら、長倉先生はその論考を進展させる方向に、一方網野先生はそれをこの世から抹殺する方向へと舵をきることになった分岐には、異なる原体験が横たわっていたのである。

とはいえ、「社会史の現在」とも評価される網野史学も、戦争と敗戦という時代のなかで歩みを開始した「戦後史学」という枠組で捉えるならば、その原体験によって道は異なることになったとはいえ、長倉先生が歩んだ「戦後歴史学」とともに、同じ地平に立つ研究体系であるということが許されるはずである。ならば、長倉先生も網野先生も失ってしまった現在、私たちは「ポスト戦後史学」を語れる段階に立ち至っているといえるだろうか。日本社会の空気が、ナショナリズムの台頭を許すような気配を漂わせていると感じるのは、おそらく私だけではないだろう。長倉保、網野善彦両先生の歴史研究は、覇権主義に結びつくナショナリズムの台頭を許さない強い決意のもと、日本の歴史を世界史のなかに関き、人類の前進に寄与する研究を後進の私たちに望んでいることはまちがいない。この思いを真摯に受けとめるとき、ポスト戦後史学にいたる原体験の一つの在り処は、まさに今この会場にあるアジアの人々との交流のなかこそ見出されるのではないだろうか。私には、そのように確信される。

最後に、長倉保先生の蔵書が上海水産大学に寄贈され、「長倉文庫」として日本研究に役立てられていること、また網野善彦先生は、自らの亡骸を献体されたことを附記しておきたい。

- (1) 例えば、二宮宏之「戦後歴史学と社会史」(『歴史学研究』七二九号、一九九九年)は、戦後半世紀の歴史学の歩みを、戦後歴史学と社会史の関わりを軸にして振り返っている。
- (2) 永原慶二「20世紀日本の歴史学」吉川弘文館、二〇〇三年、参照。
- (3) 社会史の広がりを一九七〇年代以降とする論著も多くみられるが、私の現場感覚からは、その本格的な広がりは一九八〇年代以降のことに属する。
- (4) 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」(前掲注(1))、参照。
- (5) 農村史料調査会編『近世農村の構造』山川出版社、一九五二年。
- (6) 歴史学界の動向に関連しては、一九五五年に日本共産党のいわゆる六全協(第六回全国協議会)が開かれ、武装闘争方針の転換により、国民的歴史学の運動が退潮していったことに注目される。
- (7) 洪沢敬三氏の組織した九学界連合の活動は、学際研究の代表的なものだろう。
- (8) 永原慶二「20世紀日本の歴史学」(前掲注(2))、参照。
- (9) 同右書、参照。
- (10) 「長倉保先生著作目録」神奈川大学経済学会編『商経論叢』三〇巻一号、一九九四年、参照。
- (11) 安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提」『歴史学研究』一六三号・一六四号、一九五三年。
- (12) ベルリンの壁崩壊に象徴される東欧革命に始まった社会主義圏の動揺は、一九九一年末にはソ連邦の解体にまで至った。
- (13) 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編『屋根裏の博物館』二〇〇二年、参照。

(14) 鹿野政直「日本文化論と歴史意識」『岩波講座 日本通史』別巻一、岩波書店、一九九五年、参照。

(15) 石井進「社会史の課題」『岩波講座 日本通史』別巻一(同右注(14))、参照。網野先生自身は、自らの研究領域を日本中世史、海民史としており、社会史と位置づけることはなかった。

(16) 網野善彦「若狭における封建革命」『歴史評論』二七号、一九五一年。また、この年「封建制度とはなにか」『日本歴史講座』第三卷中世篇(1)、河出書房、も発表している。

(17) 網野善彦『日本』とは何か』講談社、二〇〇〇年。

(18) 須田努「運動史研究の『原体験』」『歴史学研究』八一六号、二〇〇六年は、運動史研究を研究者の原体験にこだわり整理したすぐれた論考である。

(19) 長倉保「幕藩体制解体の史的研究」吉川弘文館、一九九七年。

(20) 代表的なものとして、『歴史としての戦後史学』日本エディタースクール出版部、二〇〇〇年、が上げられる。

附記

このノートは、二〇〇六年九月二二日、中国安徽省の阜陽師範学院で開催された国際シンポジウム「中日文化と民俗社会―近代と現在の課題と展望―」における口頭発表、「原体験としての戦後史学―日本史学の現状と課題―」に基づく。海外での発表という貴重な体験の機会を与えてくださった倉石忠彦・倉石あつ子両先生に、この場をかりて心より感謝の意を捧げます。